

病床記録

5 日 + 1 1 日

頸椎症性神経根症
頸椎椎間板ヘルニア

内視鏡に手術、ヘルニアの摘出、椎間孔拡大術

2020年 8月11日（火）手術中止

2023年 5月8日（月）手術

2023. 5. 12（金） 小野島 徹

頰椎症性神経根症手術「無理しないで良かったかも？の日」

何ともまあ思い出に残る日になったもんだと思う。

今日は、2020年8月11日外科手術の日である。決して忘れはしないだろうが、書き留めておくことにした。

<これまで>

右肩は2年も前からが痛かったのだが、卓球のやりすぎのせいだろうと思っていた。それが3月前ほどから前腕に痺れが出てきて止まらない。パソコンのマウスを持つことさえままならない状態で、これはたまらないと近くのH整形にかかった。(5月18日)レントゲンを撮ったら「肩健板断裂」の診断。「メチコバル」を処方されて、リハビリを受けるが、痛みは増すばかり、二の腕の痺れは痛みを伴い斬ってほしいほどだった。(6月中通院)

<7月13日> H整形からNS総合病院そしてN中央病院へ

それで、手術を必要かどうかの判断のため、外科医院の紹介で、MRI検査を「NS総合病院」で撮った。痛い向きで首を固定されるので腕が痺れてきて失神しそうであった。首の向きで腕が痺れるのだ。せつかくここまで我慢してきたのだから、手術を放棄するわけにはいかないと必死でこらえた。我慢できなくなって、途中で10分くらいで機器を止めもらって一呼吸入れた。検査の結果は「頰椎症性神経根症」。神経の管が横から押されて少し細くなっているとい診断。その後、薬は「ロキソプロフィン」に変更となった。何やかんやで、薬だけで6種類以上となり薬漬けで心が萎えてくる。「ロキソプロフィン」は持病のぜんそくに悪いと知って、それを伝えたら、「リリカ」に変更。やっと、手術ということになった。しかし、手術はここではなく、N中央病院ということで紹介状を書いていただいた。予約日は7月17日。

<7月17日> 事前の検査で問題発覚

N中央病院で検査を受けるが、またもMRIにCTスキャン、身体を動かしてはならないらしかったので、事前に痛くて我慢できない旨を話すと、肩に痛み止めの注射を打ってくださった。そして、検査室前に行ったのだが、なかなか始まらない。30分ほどで検査が始まったが、今回も失神しそうであった。でも、せつかくここまで我慢してき

たのだから、手術を放棄するわけにはいかないと必死でこらえた。やっと、手術の日取りが決まるとしたら、M医師の診断は、心電図検査で不整脈が見られたとのこと、そして呼吸器も怪しいので、もう一度内科の診察を受けることになった。予約日は7月29日

< 7月29日 >

内科T医師の受診で、かかり付け医での薬の飲み方を注意される。

< 7月31日 >

M医師の診断で、内科健診の結果等からようやく手術が了解されて、8月11日（火）に手術という予定になった。前の3日間は土日と「山の日」の祝日とが重なって連休だったので、4日前の8月7日（金）に入院し8月11日（火）に手術という予定になった。

< 8月7日（金） > 入院 手術4日前

入院後、またも検査。レントゲンの優れた機器らしく2方向イメージングシステムかな？またも首を固定された。マスクをして、あちこち方向を変えて撮影。途中からとても息苦しいので殻とマスクを外させてもらった。若い技師で、私のわがままを許してくれた。それでも、苦しくつらかった、これで3度目だ。でも、何が何でも我慢した。このころは、痛みが前より薄れてきていた。

短歌

・車椅子乗せられ向かふ検査室歩ける身にてこそばゆかりし

手術前に4日間もの入院で、少しは退屈だったが、おとなしく？していた。4人部屋を希望したら、運よく信濃川が見えるよい場所が当てられた。

短歌

・何となくこの世を思い胸騒ぎ深呼吸する手術前日

・マイコップ使って飲んで落ち着きぬ手術前日ボトルのお水

< 8月11日（火） > 手術当日

{朝6時半} 新米さん点滴失敗

私は、朝早く、もう一度トイレに行きしっかり準備していた。ところが、予定の朝6時になっても点滴の看護師さんが来ない。手術は10時の予定。心配になって、声をかけると思い出した？ようにして始まった。どうやら新米さんらしくおどおどしている。どちらの手がいいですかと言うので、右手が痺れるので左手にとお願いした。

左手の甲を擦ってばかりいる。場所を確かめているらしい。やっと決意した様子で刺す。が、2度3度と刺された感じがした。やっと終えたかと思ったら、これから本当？の点滴針を刺すという。痛みがきたが、どうもおかしい。「抜いてもいいですか」という。「どうぞ」と応える。「失敗しちゃったらしいので、今度は右手に刺していいですか」と聞いてきた。「どうぞ」と応える。

右手になった。今度はスムーズに刺した。「痛くはなかったですか？」と聞くので、「さっきの三分の一だった。」と答える。ところが、看護婦さん、いつまでもモゾモゾしている。見たら、右手から血の混じった点滴が漏れ出ているのを止めようとしていたのだ。漏れも止まって、終わった。ベッドの血の汚れは、これから手術でベッドを入れ替えるのでこのままという説明があった。

やっと終わって、若い看護師さん、そのまま帰ろうとする。私が「点滴が、あまり垂れていないようだね。」というのと、調整してくれて「9時半頃に終わるように合わせました。」と言って戻った。失敗した左手の甲は刺した穴の跡が見えるけれど塞がって血が止まっていたからか、バンソウコウすら貼らないで行っちゃった。年を取ると手の皮が厚くなるようだからしょうがないか。それにしても昔読んだ「オタンコナース」の漫画のようなだと思った。誰も、新米の時があるのだからと平静を装った。

{待機 8時頃} 快晴なれど動揺の浪高し

その後、朝食は抜きなので、病室でいつもの5チャンネルの羽鳥の番組を見ていたら、「墓場の墓場」の話題で縁起でもないテレビを切る。窓の外を見ると珍しく快晴の景色。大信濃川の岸辺の景色だ。このけしきを、いつもは我が家の方が狭いながらも池があり鯉が泳いでいて飽きさせないのでいいと思っていた景色である。このところ、曇りや雨の日が続いていたせいもあり、広いけれど変化のない絵葉書のような此処の景色はつまらないと思っていた。ところが、今日は珍しく快晴。青い空には飛行機と飛ぶのも見えた。いい景色だなあと感心するが「これが見納めか？」などと不吉な考えが過って、慌てて打ち消しもう考えないこととした。

俳句

・病院のガラスは厚しヨット見ゆ

短歌

・青空に飛行機見ゆる手術の日ガラスの外はいつもの景色

{手術前 9時} 手術1時間前

家内が早目に来て（8時35分）、何かと話し気が晴れる。9時に病室で手術着に着替える。点滴の管があるので少し手間取る。（家内はコロナウイルスのため待合室で待機）私はそのままずっと30分以上、椅子とキャスターだけの部屋で独りポツンと待つことになる。ベッドは既に運び出されていたので、寒いので毛布をかぶって過ごす。

{手術直前 9時40分} >

いよいよ手術室へ、心臓が高鳴る。いつもより息苦しい。こういう時は、苦しくなったときに吸う、「吸入器」を一回吸えば楽になるんだがと思いつつ、「吸入したい」と言わずにいた。まあ先生にお任せだと黙っている。名前を確認、心電図計、血圧計を身体に吸い付け。そこで、麻酔科の先生が来られて、聴診器で私の呼吸を聴く。それで、全てがオジャンになった。喘鳴がするらしい。手術を中止したいという。天を仰いだ。すでに天を仰いでいる格好だが。

ああ何としてでも手術を終えたい、これまでの難儀が無駄になると思うと辛い。やって貰いたいけれど怖い。執刀される先生が危険だとおっしゃるのに逆らうことなど到底出来ない。一般に言われているような激しい発作はここ数年一度も出たことはない、吸入器を吸ってでもやりたいなどとはとても言えない。無理やり手術を受けるほどの覚悟はない受け入れるしかない撤退だ！

短歌

・ 嗚呼悲し／悲しの他に何も無し／手術のできぬ身体と分かり

<手術中止後> 床に流れる血

妻が話しを聞いて驚いていた。妻にも先生にも悪いことをした。もっと詳しく喘息のことを伝えるべきだった。何が何でも早くこの痛みから解放されたくて、私が十分に知らさないでいた報いだ。妻は、私の落胆ぶりを気遣ってか、あまりなじったりしなかった。やりきれない気持ちで、部屋に戻った。

誰に当たってみようもない、全く身から出た錆だ。こうなれば少しでも早く、用のない点滴を外してほしいので、看護師さんに頼んだ。私は望みが絶たれがっかりしてベッドに腰掛けて点滴を外す様子を見ていなかった。看護婦さんも抜き終わって戻り支度をしている。すると、指先あたりが生温かい、見たら、外すのに失敗し、血が流れ出ていたのだ。刺すとき上手くいかなかったから、抜いた後も上手く血が止まっていなかったのだ。だけど今となってはどうでもいいという気持ちだった。まさか

これで死ぬこともないのだから・・・血に濡れた床がきれいだった。強行したら死んでいたかもしれない、ふとそう思った。死なないで良かったのかも・・・。それは、神の領域のことで分からない。

短歌

・健康な身体目指して出直しだ元気に生きよう手術もするぞ

その後は、N病院の呼吸器科の先生の診断を受け、喘息の症状がなくなったら再手術ということになった。そして、言われた通りに喘息の薬を飲み4、5か月過ぎた頃には、肘・腕の痛み・痺れも治っていた。それで、もしまた痛みが出たら手術してもらえるとM医師のお約束をいただき、その後、喘息治療は地元のNS総合病院でみていただくことになった。

その後、痛みもい嘘のようにとれていった。そして、3ヶ月過ぎた頃からまた、卓球をし出し、それなりに上手になるのが面白く、だんだん夢中になって愉しんだ。

2年半経過

<2023年 痛みの再発と手術>

三年後の待望の手術・・・、怖れていた事態発生？

ところが、2年半過ぎた今年（2023年）の2月ころからまた、痛み出してきた。そして、通常紹介状がないと診察してもらえないいきまりだったが、3年前のいきさつと今の様子を看護師さんにお話したところ、M先生の承諾があり、再手術を前提に診ていただき連休中の手術と相成った。

前回は、野球の松阪大輔選手も同じ頸椎症性神経症で、彼の場合は埼玉の病院でレーザー手術で一日で終わったというのをネットでみたり、自分の50歳のころ受けた腰椎ヘルニアの手術が比較的スムーズに行われ経過も良かったので、軽い気持ちでいた。しかし、今回は前回より時間的な余裕もあって学習すると、さまざまな高齢によるリスクがあることに気付き、不安が高まってきた。しかし、とても我慢できる状態ではなく、手術を依頼した。

4月28日（金） 入院 手術3日前

レントゲン撮影 CT スキャン MRI 撮影はいずれも首が後ろへ反らすことができずに3年前同様、痛みを耐えながらの事前の撮影であった。29日に説明をうけ、同意書にサイン、頸椎症性神経根症 椎間板ヘルニアの二つ 方法は内視鏡に手術 ヘルニアの摘出、椎間孔拡大術 3～4時間程度掛かるという

5月1日（月） 手術の日

{朝} 点滴を付ける

朝食は抜き、水以外は一切口にできない。腹が減って食欲があるのは健康な証拠だからガマンしてくださいと妻からのメール。部屋に、点滴の管を付けに看護師さんが来る。今回も今年採用になったばかりの子らしいが、今日は二人、新米さんが。右手に刺そうとするが、私が「右手ですか？ 痺れる方の手なんだけど」と言うと、なんか「本当は右と」かなんとかむにやむにや言って、「左手にやります。」と言う。一度刺して、終わったかと思うと、また、刺して来る。「痛かったですか？」と聴いてきた。注射されて痛くないはずなからうがと思いつつ、「一度終わったかと思ったらまた刺したね。」という、またムニャムニャ言う。どうもそういうことらしい。一度目は皮膚で、二度目が血管だったらしい。私も緊張していてあまり覚えていないし突っ込んで聞かなかった。でも、何かする度に「有り難うございます。」とか低姿勢に対応してくれるので可愛く思えた。左手に上手く刺し終えた。

{午後1時半頃} 手術室へ 点滴の管に空気

看護師さんが二人部屋に来て、急に慌ただしくなる。手術室から催促が来たと言って、病衣を手術用のものに着替えさせられる。先輩の看護師さんが、点滴の器具を外そうとするが、厄介だ。私が右腕のほうを先に脱ぎかけたせいか、左の袖と管が絡まってなかなか点滴の器具を通せない。すると、その先輩看護師さん、繋いであるところを引きだしてすぽっと抜いて、袖を通してからまた繋いだ。怖いことするなあ、空気が入らないかと思って管を見ると、すでに空気が入って、私のほうに向かって吸い込まれているのがはっきり見て取れた。以前、空気を注射すると眠くなって死んでしまうというのを何かで読んだ記憶があって不安になった。しかし、剛腕？看護師さんのやることだから大丈夫とも思う。その看護師さんが離れたすきに新米看護師さんに聴くと少しくらいなら大丈夫なんですと自信ありげに話す。それでほっとする。（あとでネットで調べたら200m1まではOKと書かれていた。管の長さで、2mくらいだと書かれていた）

{手術室} 緊張が高まる

妻に手術室前で、最後のお別れのように一言声を交わし、手術室へ送り込まれる。手術室に運び込まれる。体中に検査器具を取り付けられる。血圧、脈拍、血流、酸素濃度、脳波などみんな計器でわかるようになってるらしい。それに、何人ものスタッフの姿が見えて、安心する。一人のドクターらしい人が何か面白いことを言って呉れたが、緊張していてそれどころでなかった。口にピットリマウスを嵌められてその後は、直ぐに意識がなくなる。とたんに全く意識が無くなる。そのまま身体を切断されても分からないということだろうか？

{午後5時半ころ} 目覚める。悶絶する。

よく映画でみるようにぼんやりと人の影が浮かんでくる。ああ、手術したんだったな気付いた。自分の部屋らしい。と気付いたとたん、猛烈な痛みが右腕側から襲ってきた。「ウワー」と大声を発した。人の顔や名前が脳裏をぐるぐる回る。「頭が

パーにナルー」と思った。「痛ーイ 痛タタタタ 痛タタタタタタ」と泣き叫ぶ。痛いのが分かって欲しいから精いっぱい声を出す。「ナンダコリャー」とも言ったかも。とにかく叫ぶしか手がなかった。叫べば少し気が晴れる。この寝かされている首の向きは痛い姿勢だと気付いたが、両手両足器具で止められているようで動けない。それでも右手を動かそうと、誰かが痛い右腕に触ってくる。「何をするー 右がイテンだ触らないでくれー」と叫ぶ。喋りにくいのは、口にも酸素マスクが付けられていると分かった。辺りの迷惑なんかも頭に浮かんだが、気遣う余裕などない。恥も外聞もない。どうでも良い。大暴れして泣き喚いた。

すると、「・・・注射をしましょう。」というような話が聞こえ、お尻に注射されるのがわかった。睡眠薬が入っていたのか少し楽になった。ボウーとして少し痛みは取れた。が、まだ疼いている。男の名誉も何もうち捨てて「イタイヨー イタイヨー」と泣き続けた。

{午後7時頃} どのくらい痛いのか? と聞かれ 何百倍だと答える

どのくらい痛いのか?、と聴かれた。「200%だ」と答えたが、「それはない。これまでに体験してきた痛みを100として」というので、だから{2, 300倍だ}と答えると、むっとした様子。どうも嫌われたらしい。これは拙いと思ったが、正直な気持ちだから仕方ない。どこかで読んだ気がする。痛みや痺れは、耳鳴りなどと同じで聴診器でもレントゲンにも反応しないから、医者に分からないという話。だから、辛いのだ。イタイイタイと言うしかない。大げさでなく今までで一番痛いのだ。

{午後7時半頃} 身体の向き

この夜は男の看護師さんが主な担当らしい。その看護師さんに、身体の向きを変えてもらいたいと言った。自分の意見が通り、身体を左向きに変えてもらい少し薄らいだ気持ちになった。自分で向きを変えようとしないようにと注意を受ける。ところが、その姿勢もすぐに辛くなる。でも、そう度々は頼みづらくて、痛いけど、もぞもぞと自分で少し元に戻す。

{午後9時半頃} 酸素マスク

酸素マスクが邪魔だから外してくれないかと頼んだ。これは、外せない「酸素濃度が低いから」という。私が「オレは元々96から97位しかないんだから、是非頼む」とせがむ。それならと、了解して外して呉れた。次は12時半にまた来ます。用がある時はこのナースコールを押すように言われ看護師さんは去る。これからまだ、3時間も後だ気が遠くなる。しばらくすると、また戻ってきて「数値が90にまで下がったので酸素マスクを付ける」という。もっともな話なので、わがまま言ったことを詫びて酸素マスク付けてもらおう。息苦しいけれど死んだらお終いだ。付けてもらって安心した。足に付けた靴下に空気を入れて血流を促す器具が心地よかった。左右の足交互に空気をブーと送り込んで揉むようにして呉れていた。これで血栓ができないようにもしているらしい。

昔は良かった。こんな時は寝ずで家族が立ち会ってくれたもんだと思う。このベッドの隣りに布団を敷くなどして、細かな用をたしてくれたのになどと昔を懐かし

む。こんなんじゃこのまま死んでも、誰も証人がなしではないか。看取った人がいない寂しさを思った。コロナのせいで、こんなふうにして寂しいまま死んでしまった人もいたんだろうなと思う。辛さを聴いてくれる人がいないのをなんとも悲しく思えた。右のコメカミ辺りがズキーンとして痛い。今までないことなので、心配した。血栓ではないかと……。一晩中哭いていた。どの格好でも痛い。

{深夜 0時半頃} ベッドの頭の方を上げてもらう

少し頭の方を上げてくれるように看護師さんに頼んだ。例の男の看護師さん「それはだめなんです」と言う。いつもは手の届く所に操作のコントロール器具は掛けてあるのに、この日は、離れた脚の方にかけてあって動かせないのだ。少しでも、周りの景色が見えて、安心だから。だけどだめだと断られた。ほんの少しでいいからと、また、縋るように頼む。それならと、少し上げて呉れた。無理強いをしたのはこれで、二度目だ。有り難く思う。

しばらくして、別の看護師さんが見回りに来た。それで、また、少し頭の方を上げてほしいんだけど、上げてもらえないかと頼んだ。「ダメなんですよ。」「もう少し我慢してください。」「と言う。それで、私は狡い手を使った。「さっき、前の看護師さんはちょっと上げてくれたんだけど、もうちょっとでいいからまた上げてほしい」と頼んだ。小さな共犯を強いたのだ。少し上げてもらった。

5月2日(火) 手術の翌日

{早朝4時} もっと外がみたい

カーテンを上げて欲しいと頼んだ。あれはブラインドだと言う。昨日の女性の看護師さんだろうか。みんな同じ服装で、マスクをしていて顔が分からず、そのうえ連休でどんどん担当が変わるので名前も分からない。それで言い直して、「ブラインドを上げてくれないか」と言ったらだめと言われる。陽が射して熱くなるからと言う。オレも負けずもう夏だから陽は差し込まないというと不服そうにしていた。この時は自分が」折れた。ボーと痛みを堪えて時間の過ぎるのを待った。

看護師ってなんだろうと恨みに思う。丁度コロナ禍で時期も悪かったと思う。手術跡の痛みより、電極を止めたところが痛いと言っても診てくれない。看護の「看」の文字が疑われる。昔なら、付き添いが許されて、ベッドの横で寝てくれたり、水が欲しいと言えば水差しで飲ませてくれたものなのに……。今朝お薬を飲む時は手伝ってもらえた。ナースコールはあっても遠慮しがちだ。身体の向きをかえるのも、度々は出来ず、遠慮してしまう。あげくは何度か自分でした。

{朝7:00} 頭がズキーンとしてコメカミが痛い

コメカミの痛みの事を看護師に伝えると、こともなげに電極を止めていたところだと言う。傷なら消毒してよと言ったつもりが聞こえなかったのか、何も処置はしてくれない。診てもくれない。かさぴたができ、おでこになっているのに。言われてみればって、他の頭の3カ所も傷が付き膨らんでいる。相当暴れたんだろうか。腕は手術前と同じくらい痛いし、院の説明やネットにも痛みがとれない場合もあると書いて有ったのを思い出し凹む。だれも心配無い。治るとは言ってくれない。その一言がない。立場を替えれば言えないのも最もにも思う。俺は最悪のあまり変わ

らないケース何だろうかと落ち込む。

{ 8時半} 血に染まった蕎麦殻枕

看護師さんが交替し、例の言葉遣いの丁寧な新米看護師とその先輩看護師さんが来る。そして、どんどん衣類を替え、靴下を脱がし、点滴類をはずす。少し乱暴。新米さんが尿の管も外す。少し恥ずかしい。そんなところを触らせて申し訳なく思う。

「痛かったですか？」と言われたが、ぞくっとして気持ちが悪かっただけで痛くはなかった。この新米看護師さんの点滴や注射の痕はその日のうちに跡形もなく消えていた。上手だったと思う。

気持ちが良かった脚に付けた特殊な靴下に空気を入れて血栓を防ぐ器具も外された。みんな外されると急に身軽になって、なんか治る気分になされた。

もう起き上がってもいいですよと言う。なかなか起き上がれずに手伝ってもらう。すると、枕がずり落ちてきた。見ると、頭があった箇所が血で真っ赤になっていた。換えて来ますとって年長の看護婦さんが持って行った。が、それっきりで夕方に他の看護師さんに催促して持って来てもらった。私は、前回の手術の際、喘息が出たのは、もしかしたら、この病院の蕎麦殻枕が原因（アレルギー）」かと思って、家から自分用の枕を」持ってきていたので、普段は夕方までそれを使っていた。血で汚れたのはその病院の蕎麦殻の枕だった。この蕎麦殻枕の良いところは、形が高くしたり低くしたりと換えやすいところだった。慣れるとゴソゴソ言う音も気にならなかった。それにしても、おれはどうもこの病院では血に縁があるらしい。でも、もう大丈夫だろうと思う。

{ 9時頃} 痛みが薄れる

M先生が来られた頃は安定していたので、「今はまだ痛むが治る予感を感じる」と伝える。1, 2時間前までは恨みの一言でも言いたい気分だったのに……。その後は、調子に乗って家にメールをうったり、販売機まで水を買に行ったりする。メールで妻に、先生は手術後どう話されたか、聞くと「ヘルニアが少し厄介で予定より出血したが、輸血するほどじゃなかった」そうです、という返事。やっぱり、血に縁があるらしいと思った。

{昼} 前腕が腫れて痛む

お昼になって、前腕が腫れてきて猛烈に傷みだす。触らなくともぎりぎり痛む。座薬を入れてもらう。3時頃M先生が来られたので、昨夜は眠られずに過ごし、今夜もまた眠られなくなる恐れがあるので、その時は看護婦さんから、座薬か注射を打ってもらえるように頼み了承される。妻とのメールはまだ痛くてやりにくい、ただ一つの救いだ。何度か交信し励ましを貰う。「有り難う恭子さん」とうつ。

{夕方}

水はほとんど吞んでいなかったので夕方まで小水無し。おしっこの際の痛みはなかった。ほおとする。

18:00 右手が痛くて左手で食事 左手でメール

20:00 注射ではなく、座薬をする。自分で入れる。寝てするようにアドバイスされる。生身の人間なんだから痛くて当然と妻からのメール

ドロイテとグッシュ

小野島 徹

母親の胎内にいるときから一緒
仲良い二人
ドロイテとグッシ
一緒に生まれ
指紋も手相も同じ
向きが違うだけ
双子ですか
いえいえそれ以上の間柄です
いつも隣同士で、七十五年
水を掬う時はぴったり寄り添い
水も漏らさぬ間柄
何もかもそっくりながら
ちょっとドローテが器用で
先回りして仕事をしていた
永い間そうして働いた結果
突然ダウン
痺れと痛みがドローテを襲った
「痛イヨー 痛イヨー」と泣き叫ぶドローテ
その痛み、他人には伝わらないが
幼なじみのビシューにだけは伝わり
彼はドローテをやさしく
そっと撫でてくれました
「永年ご苦労さまでした」と
「頑張ったね」と
「これからは、私ももっと協力するね」と
声かけながら一緒に涙を流してくれるビシュー
だれもない深夜の小部屋で

main droite	仏語の右手
main gauche	仏語の左手
bras et bras	仏語の腕

5月3日(水)

{深夜} 懐中電灯で顔を照らされる。眩しすぎる。生きているかどうか確かめるにしてももっと穏やかな方法があるだろうと思う。ただ一度は確か、右手が痛いので上にして、左手をベッドの下にだらりと掲げる格好をしているときがあって、看護師さんが驚いたのかも知れない。

座薬は夜一回だけですんだ。

{早朝} 4:44 朝の明かりとともに、腕の痛みもとれてきているようでほっとする。バンザーイとメールする。前より悪くなるパターンかと気が気でなかった。朝：顔を洗う時、目の回りがじゅりじゅりした。涙の塩らしい。

{午前} 入浴 シャワーだけという制限付きだったが、頭の電極を抑えてできた傷が心配でシャワーはしないで身体だけ洗う

{午後} 5時 看護婦さんの巡廻診断、食事の事、お通じのこと、痛みや痺れの箇所や程度、力比で筋力診断など。

5時15分頃、リハビリのS技師、慌ててやってきて部屋で急いでリハビリやらせてくださいと言う。日を勘違いして明日からだと思ったと言う。「さっき看護婦さんが、力比をやったばかりだ」と話すが、是非にという。先生に報告しなければならないからと。私が無理にやるとその後、痛みが増幅してしばらく痛みが残るので、痛いリハビリはしばらくしないことで、M先生の下承も得ていると伝える。が、なかなか承知せず、また一通りのさっきと同様の作業診断を行い記録した。

{昼過ぎ} 大便が催してきて、硬すぎやしないか不安だったがやや粘っこい便だったが無事にでてほっとする。前腕の痛みがまだとれず、90から70%痛む。入りの説明書で、待食というのを初めて知った。調理の後、食べるまでの間が空かないようにするため、大勢に給食する時待たせること（2時間以内）とあった。。自分はアレルギーが少なく偏食でなくて何でも食べれて良かったと思う。けれど、エネルギーと塩分コントロールされた特別食だと気付く。あまり話を聞いていなかった。味が薄くご飯以外は材料をごっちゃ混ぜにした流動食みたいなものが多いと思っていたが。いろいろ気配りしてしていただいていることに感謝する。

{夜} 歩けるようになると、夕食から朝食まで14時間もあるので、一階の自動販売機で甘いチョコとパンを買ってきた。買ってしまってから看護師さんに聞くとデーターをとっているからだめだという。確かに特別食なのだ。せっかく、ここで拘束されて酒も吞まずにいるのだから、ガマンして、協力しようと、冷蔵庫にしまう。四人部屋でも冷蔵庫がついている。

消灯が9時半、寝る向きが丁度蛍光灯が当たる向きなので、9時半まで逆向きで寝ていることを看護師さんに話し了承を得る。

5月4日(木)

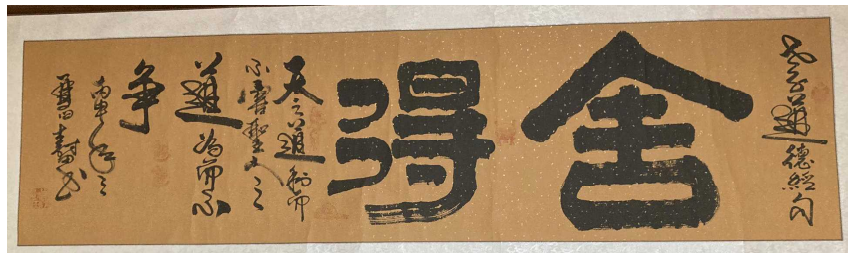
{早朝} おなかが空いて買っておいいたパンを食べる。
ほぼ大丈夫という確信に近いものを感じる。

{午前} 5階まで階段3往復半歩く。
入浴 頭を洗う、首の覆いの上部が剥がれ出していて、お湯が入ったのではとまた不安になる。疑心暗鬼、急に前より腕が痛くなったような気になる。貼り替えてもらう。異状はなさそうである。どんなふうだか看護婦さんに聴けば良かった。

{夕方} 人差し指と親指の痺れが撮れず、字が書きにくいと感じる
18:58 手術前より間違いなくよくなりそうでほっとする。治りそうな予感が今は確信に近いものになっていると妻に伝え、感謝する。寂しいけれどガマンガマン。繊細さに欠けたがさつなオレがよく生きてこれたなあと感謝する。もう少し慎重に歩まねばと自戒する。
20:00 痛みは、前腕だけ30%。痺れは辛くはないが、痛みが少々。左手で早くよくなれお疲れ様と言いながら揉んでやってる。

5月5日(金) 快晴

{早朝} 2時から大谷翔平の試合を少し視る、腹が空き牛乳を買ってきて呑む。
どら焼きも買ったが食べずに我慢。
7:00 看護師さんリハビリは9時半からと通告のように伝えて去る。
7:10 お薬をもらう。(血圧・痛風・痛み止め)
7:25 お隣の患者sさん ナースコールをしたらしい。看護師さんが来る。
看護師「どうしたんですか」 s「・・・」 手のよころの皮が剥けていたらしい。傷口を見て、驚いた様子。しばらくして 看護師「あとで、先生に診てもらいますね。」と言う。その後、上級らしい看護師さんが来て同じような対応をする。
「擦りむいたの？」 sさん「ムニャムニャ」処置したかどうか不明
私の頭の傷の場合と同様、傷薬さえ付けてくれないようだ。
10:00 スマホの地震の警報鳴る。震源地の珠洲市は震度6 死者1名
11:00 入浴、肩より下の高さでゆっくり温まる。腕にも良いようだ。
{午後}
13:00 昇からスマホメールで扁額の読みの依頼、古文書を読み解くのは嫌いではないから挑戦する。テザリングでPCのインターネットをできるようにして、PCでメールを読み取り文字を大きくしてみる。



老子の名言と分かる。

「孝道德經句 舍得＝「惜しいと思わない、未練が残らない」の意味
天の道は利して害せず、聖人の道は為して争わず。

丙申三月〇日 〇〇書

{夜}

10時 5月5日 21時58分 スマホの地震の警報鳴る。新潟の中央区は震度3震源地の珠洲市は震度5 病院の警報なく、看護師さんが伝えて回ったようだ。夜は寝たり起きたり、パソコンの画面を夜モードにしてこの文書を書く

5月6日(土)

朝6時 夕食後の投薬から半日過ぎ、痛み止めの薬が薄れてきて、痛みが少し上昇。
朝7時 W看護師 採血に来る。退院できそうかどうか聞いてみる。
朝7時55分 朝食
朝8時10分 薬飲む
午前9時 レントゲン撮影。
午前9時半 看護師さんによる健診 血圧126/80 脈拍71
午後1時半 リハビリを受ける 20分ほどで終わる。
午後3時15分 ふらっとM看護師さん来て、話を聞いて帰る。ほぼ私の愚痴と嘆きだが聞いてもらおうと有り難かった。ほぼこの1週間、会話してない。要件を話したり受けたりするだけだったから。出来れば彼女の趣味や愚痴も聞いてみたかった。これが大事なんだろうと思う。コロナ禍でその機会が無くなっている。
午後4時~階段歩き、5往復。転んで迷惑掛けないよう慎重に歩く。
午後4時半 入浴
午後5時 家に定時の電話連絡、メールより楽で良い。
午後8時 寝に就く。

5月7日(日) 退院前日

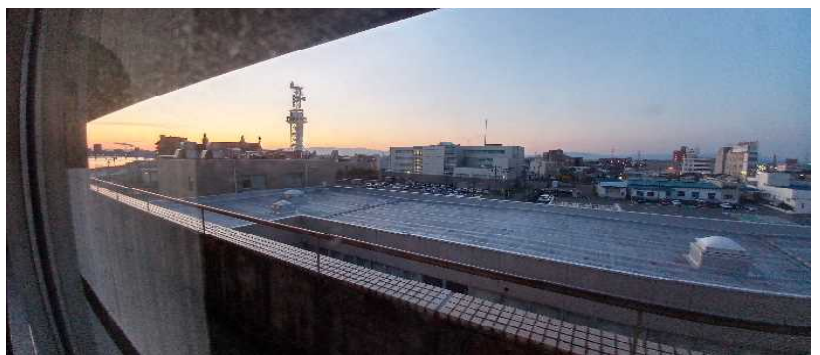
朝4時起床 PCを立ち上げ、久々にFBを覗いたり、「家族アルバムみてね」を見てコメントを送る。画素が大きく細かなところもよく見えて面白い。
孫とパパの将棋に感想を送ったりして時間を過ごす。
朝6時 痛みと痺れは昨日より少し和らいでいる。今日は日曜日でリハビリは無し。
看護婦さん来るだろうか、日曜日だからほとんど顔を見せない。どうでも良い。痛く無ければ気楽なもんだ。昨日に続き雨模様。雨の方が気分落ち着いていい。

一日早く退院する若い男の人に首の後ろの手術した箇所の写真を寫してもらう。



5月8日(月) 振り返る

起床 4時半外が明るくなるとPC入れても隣人の眠りの妨げにならない。
外の景色は、県庁の森が見えて、信濃川見えて景色は悪くはないが街の景色は季節感がなくて良



くない。自分の家の十坪ばかりの庭が恋しい。庭のプラムの実は大きくなっただろうか、皇帝ダリアは背を伸ばしただろうか、庭の池の水は循環しているだろうか。老爺柿は？黒百合は？などなど気になる。

コロナ禍での入院は大変だったと独り振り返る。話し相手がいない。会話が制限されている。洗面所に制限の貼り紙があって患者同士の会話を控えるように書かれている。今日からコロナは五類に訂正されて此处での対応は少しは何が緩められるのだろうか？

お見舞いと言えば、一度もお見舞い出来ずに、病院で亡くなられた老人会の前会長を思い出す。人好きな人だったから寂しかっただろうな。本来ならたくさんの方がお見舞いに来ただろうに。看護師さんは事務的だ。やさしそうにはしても要件を伝え、部位ごとの痛みの程度を聞き、体温・血圧を計れば、オシマイだ。

此处で、オシマイを迎えた人たちはどんなに寂しかっただろう。死にザマは、あの全身麻酔で逝くのが一番だ。苦しんだあげく独り寂しく死んでいくのは死ぬより辛い？。 町内のTさんが、ゴミ捨ての帰りに我が家の前で倒れられ、私の心臓マッサージの甲斐もなく、亡くなられた。私の父は脳梗塞で私の車の中で鼾をかいて眠りだした。その方がまだマシにに思える。などつらつら思った。もう入院は沢山だ。もし、癌になったら、痛いのは沢山だ。安らかに眠りたい。

11：00 退院する ご心配おかけしました。元気になりそうです。

振り返って、自分の気弱さにあきれています。 皆様に合掌

	親指		小指		手首	前腕		肩	傷口	頭の傷	肘
	痺	イタ	痺	イタ	イタ	痺	イタ	イタ	イタ	イタ	イタ
術前	5	5	70	20	0	80	80	80	-	-	-
2日						90	99	70	30	30	
3日						50	50	40	10	20	
4日	40	20	50	10	20	20	30	30	5	10	
5日	40	20	40	10	20	10	30	20	4	8	30
6日	40	20	40	10	15	10	30	25	4	8	30
10日	30	5	40	5	5	5	20	20	2	5	10

<ネットから>

一番良く使う指ですね。使い過ぎではないのですか。痺れは神経によるものと、血流によるものとがあります。使い過ぎなら、休めなければ使い続けるとだんだん症状が悪くなります。指も腕も同じです。腕を使いすぎたら休めるのが一番です。神経の問題は本人でないと医師には解りません。耳鳴りなどと同じで聴診器でもレントゲンにも反応しないからです。